

中国・北京師範大学との幼児教育に関する共同フォーラムの開催報告 — 相互の大学教員，大学院生の研究を中心に —

七木田 敦¹・周 心慧²

Report on the Joint Forum on Early Childhood Education with Beijing Normal University in China focusing on research in Japan and China

Atsushi NANAOKIDA¹, Xinhui ZHOU²

Abstract: Since 2012, the Research Institute of Early Childhood Education, Graduate School of Education, Hiroshima University, has conducted cooperative research with the Institute of Early Childhood Education, Beijing Normal University, under the theme “Support of the university in the professionalism of ECEC teachers.” In January 2019, five doctoral students from Hiroshima University visited Beijing Normal University for a joint forum through the cooperation of Prof. Xiumin Hong and Associate Prof. Minyi Li. In the forum, the keynote speaker from the Japanese side, Prof. Nanakida (Hiroshima University) presented a paper entitled “The issue of the transition from ECEC to the primary school in Japan,” and from the Chinese side, Prof. Xiumin Hong gave a speech entitled “Challenges and reflections on the development of Chinese early childhood education under the universal two-child policy.” Next, five doctoral students from the Graduate School of Hiroshima University reported the findings of their research, and five graduate students from Beijing Normal University of China also delivered presentations. Although the cultural situations relating to ECEC and childcare differed, the forum provided an opportunity to reaffirm the importance of early childhood education and childcare in modern society. It was noteworthy that a lot of studies examined the background of the universal two-child policy in China with a view to solving various problems such as the development of ECEC in China, sibling relationships at home, companion relationships in the nursery, the needs of infant childcare, and the need for child-rearing support. The discussions that took place provided valuable stimulation for the graduate students from both countries.

1. はじめに

2012年より広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設では、「保育者の専門性における大学の支援」というテーマで、北京師範大学学前教育研究所と共同で研究発表を行ったのを皮切りに同研究所とは継続的に共同研究活動を行ってきた。2014年には、北京において、保育の質の向上や保育者の専門性の向上が求められる中で、大学の研究者と、保育実践者はどのように連携し、どのように寄与することができ

るのかを中心に協議などを行い、研究者と実践者の協働、実践に資する成果を導くためのシンポジウムを開催した。

2019年1月、本学大学院博士課程後期学生5名が北京師範大学を訪問し、洪秀敏教授、李敏誼准教授の協力を得て、共同フォーラムを開催した。フォーラムでは、まず日本側から七木田（広島大学）が「日本の保幼小接続の課題」について、そして中国側から洪秀敏教授が「中国就学前教育の発展への挑戦」と題して基調講演を行った。その後、広島大学大学院博士課程後期学生5名がそれぞれの研究について報告し、また中国北京師範大学大学院生5名が発表を

1 広島大学大学院教育学研究科

2 広島大学大学院教育学研究科博士課程後期

行った。相互の幼児教育・保育を取り巻く文化的状況は違うものの、現代社会の中での幼児教育・保育の重要性を再認識する機会となった。

本稿では、その共同フォーラムの内容について報告し、今後の両学の連携について考える機会としたい。

2. 基調講演について

洪秀敏（北京師範大学教授）は「中国就学前教育の発展への挑戦」というタイトルで、幼稚園、幼児園教師や幼児の数が急増した中国の就学前教育に対する増加する政府の財政的支援について説明を行った。中国では保育者の配置基準は依然として低く、質の高い保育者が不足であり、農村部と都市部の格差が大きくなる傾向にある。「全面二孩」政策の背景において、2017-2035年に中国の都市部と農村部に在住する幼児の数と必要な幼稚園の数、保育者の数と資金配置を見積った結果、中国の就学前教育の資源配置は大きな課題を抱えていることがわかった。就学前教育の資源配置に関する需要とリスクを科学的に評価し、保育者養成の規模を拡大するとともに、保育者の質を向上することが必要で、就学前教育への経費の投入と保障の一層の向上を目指し、さらに、普及から資源の均衡的配置や質向上へと段階的な移行戦略が実施される必要があると述べた。

「日本における保幼小接続の課題」というタイトルで七木田敦は、日本の幼児教育で育まれた資質・能力を踏まえ、小学校教育が円滑に行われることが重要であるが、幼稚園、認定こども園、保育所は、遊びを中心とした指導を行ったり、一日が生活の単位であったりするのに対して、小学校は、教科の学習を中心としていたり時間割によって時程が決まっていたりするなど、幼稚園等と小学校は、その保育・教育のスタイルに大きな違いがある。このため、子どもたちが小学校入学時、教室において学習に集中できない、教師の話が聞けずに授業が成立しないなど、学級がうまく機能しない状況の問題が指摘されており、このような問題を解消するため、保幼小の円滑な接続が課題となっています。保幼小の連携・交流については、約5割の幼稚園等で、小学校との合同学習会や合同行事等体験的な交流（年複数回）が行われ、約6割の幼稚園で、教育課程の編成にあたり小学校との情報交換等の連携が行われているということを報告した。

3. 本学大学院生の研究発表

淀澤真帆は「幼稚園3歳児保育室における物的環境に関する研究：登園時のルーティンに焦点を当てて」と題して発表を行った。この目的は、保育室の物的環境が子どもにどのように使われるようになるかを明らかにすることである。身支度活動（登園時のルーティン）では、一人一人が物的環境に触れるため、これを対象の場面とした。データ収集は、日本の幼稚園3歳児保育室で入園式翌日から35日間、ビデオカメラで撮影を行い、アフォーダンス（affordance）の視点から分析した。その結果、活動を繰り返す中で、(1) 物的環境間の距離が把握されるようになる、(2) ある物的環境はかかわられなくなる、の2点が明らかになった。

本岡美保子は「日本の子育て文化としてのわらべうたとは？—社会性の発達に着目して—」というタイトルで発表を行った。乳児期は特に、周囲の人との関係性の中で個を確立させていくという、社会性の発達における重要な時期で、社会性の発達との関連からわらべうたとを研究したものはない。そこで、模倣や共同注意など、乳児の社会性の発達とわらべうたとの関連を、文献及び実際の観察をもとに提示した。社会性の発達に関連するわらべうたとがそれぞれあることから、わらべうたは、民衆の経験的な知識による発達概念をもとに生み出され、共同での育児に有効な手段となり得ていた可能性があること、共同育児としての乳児保育にも応用することができるのではないかとすることを発表した。

「日本の保育者による仲間集団間のトラブルへの介入」というタイトルで陳林奇は、日本の保育者による幼児間のトラブルへの介入のプロセスを論じた。本発表では、介入のプロセスに関する先行研究、研究方法や研究結果などを述べ、先行研究で論じられている「トラブルの発生」、「保育者による見守る行動」、「保育者による一時的な介入」、「トラブルの終結」とがあるが、「保育者による持続的な介入」という視点がなく、今後これを含めた5つの枠の互いのつながりで介入のプロセスモデルが想定できることを提示した。

周艶芳は「子どもとメディアコンタクトに関する研究のレビュー」について報告を行った。現代において、子どもたちのメディアとの関係は、乳幼児期に始まり、学童期のゲーム、思春期のケータイ・ネット依存と続き、さらには子

育て中の親を通じて次の世代へと、より深刻に連鎖している。このような危機的状況のもと、その現状を伝え、予防策、対応策を広める人材が早急に求められている。そこで、子どもとメディアに関する問題の基本や予防策、対応策などについて明らかにすることを目的に現在までに発表されている研究のレビューを行った。この報告では、日本における子どものメディアコンタクトの研究において、子どものメディア接触時間、そのタイプ、内容、頻度の観点から、子どもとメディア研究の今後の可能性について述べた。

周心慧は「高齢計画外妊娠で第2子を迎えた親の子育てに関する研究—中国のある母親へのインタビューを通して—」を題して発表を行った。中国の「全面二孩」政策を背景に、高齢で計画外妊娠によって第2子を出産した母親が数少なくなく、医学の視点だけでなく、子育ての心理的側面への注目も必要である。その子育ての実態を明らかにするために、中国S市に在住しているある高齢計画外妊娠で第2子を出産した母親1名を対象にインタビューを行った。その結果、母親は、身体的および精神的な負担が大きいという負の側面がある一方で、母親と父親とも第2子の子育てを通して、夫婦理解や第1子との関わりについて正の変容があったことがわかった。

4. 中国・北京師範大学大学院生の研究発表

朱文婷は、「二孩時代における中国の親の出産意欲と子育ての課題」として発表を行った。「全面二孩」政策が中国の家庭の出産と子育てに新たな挑戦をもたらしている。報告では現在第2子の出産意欲と子育ての課題は、出産意欲と実際の出産行動との間に大きなギャップが存在していることがわかった。子どもの数と性別において、娘と息子が揃うことが望ましい、女の子を好むという現象があることがわかった。また、出産意欲は主に出産観や子どもの世話をしてくれる人がいるか、母親の年齢などの要素に影響されている。第2子を育てる中で、生活に余裕がない、経済的負担が大きい、職場から家庭へ戻らざるを得ない、情緒的不安定、子どもの教育に困惑を感じる、社会的支援が不足しているなどが課題として挙げられた。最後に、前述したニーズと課題を踏まえ、新しい「全面二孩」政策の実施及びワーク・ファミリー・コ

ンフリクトを緩和する政策の提案に示唆を述べた。

華詩涵は「0-3歳の乳児保育のニーズと現状に関する調査と分析」という題名で発表を行った。二孩政策の公布によって、第2子を出産することが認められるようになった。そのため、これからの3年間に、乳児保育施設が初めて第2子の乳児を迎えると予想される。文献研究や質問紙調査、及び0-3歳の子どもを持つ親や保育施設の関係者、政府の関係機関のスタッフを対象にインタビューを行った。その結果、0-3歳児の数多くの保護者が子どもを乳児保育施設に通わせて保育を受けたいと感じており、保育の質に注目を集めているにもかかわらず、現在の保育施設が提供するサービスと保護者の要望とズレがあることがわかった。そこで、0-3歳の保護者、保育施設、政府の関係機関の3つの側面から、どのように保育の質を向上させるかについて提案した。

陽佳伶・呉霓雯・于泳稼・王妤らは、「4-6歳児のきょうだい関係と仲間の受け入れとの関係に関する研究—B市S幼稚園の第2子を持つ家庭を中心に—」という研究発表を行った。全面二孩政策の実施にともない、1980年から38年をかけた一人っ子政策時代の終焉を迎え、幼児の社会的能力の発達、特に「仲間の受け入れ」という具体的な概念に着目し、きょうだい関係が幼児の心理的発達に与える影響を明らかにすることを目的とした。本研究は、第2子を持つ家庭の幼児を対象に、インタビューを行い、きょうだい関係と仲間の受け入れとの関係を明らかにした。B市S幼稚園に通園している第2子を持つ家庭の幼児39名（4歳児19人、5歳児20人）を対象にインタビューをした結果、以下の2が明らかとなった。①幼児が持つきょうだいへの認知が幼児の年齢、出生順位、きょうだい年齢差、きょうだい同性であるか、などに影響される、②「調和型関係」にいる幼児がより肯定的な仲間受け入れ意識を持っており、その次は、「調和・対立混在型関係」、さらに「対立型関係」にある子どもの仲間受け入れ態度がもっとも消極的であった。本研究の成果に基づき、共同研究メンバーが現状を踏まえ本研究の課題についても検討した。

宋佳・趙思婕・趙爽・張禕明らは「一人っ子家庭と二人っ子家庭の幼児の第2子への態度に関する研究」という研究発表を行った。「全面二孩」政策の実施によって、中国における世帯

形態が変化しつつある。政策の利害関係者である幼児の視点から、きょうだいの誕生を迎える時の心理的特徴を明らかにすることが、仲のよい雰囲気の家を作ること、政策を順調に推進させることに意義がある。本研究では、北京師範大学の実験幼稚園に通っている年長児13名を対象に、第2子に対する態度についてインタビューを行った。さらに、データを認知、情緒、行動意図の3つの視点から分析した。その結果、第2子への態度について、二人っ子家庭の幼児が一人っ子より、肯定的な態度を示していることが明らかとなった。その要因として、性別、仲間に対する態度、仲間と関わる経験、見本としての役割、などが検討された。

最後に、段天雪・李敏誼・七木田敦・周心慧・玄正煥・叶品による、日本、中国、韓国との間で実施している共同研究の報告がなされた。タイトルは「家庭の子育てを支援し、親の育児ストレスの低減—少子化時代における日中韓親の育児ストレス・ソーシャルサポートとファミリーウェルビーイングの比較研究」である。本研究の目的は、日中韓とも出産政策を促進している背景において、親の育児ストレスとソーシャルサポートの現状を明らかにしたうえで、どのように親の育児ストレスを低減させるかを検討することである。日中韓の父親と母親（ペアリング）を対象に、質問紙調査を行い、日中韓それぞれ80組、84組、147組のデータを収集

した。その結果、以下の3点が明らかになった。①日中韓の間に、ソーシャルサポートに関する差異が大きい。②どの国の親でも育児ストレスを感じているが、感じ取った育児ストレスのタイプが異なっている。③どの国でも育児ストレスを対処することに対して、ファミリーウェルビーイングが重要な役割を果たしており、ファミリーウェルビーイングが高いほど、育児ストレスが低い。以上の結果に基づき、本研究はそれぞれの国の子育て環境を踏まえ、得られる示唆を検討した。

5. フォーラムの意義と今後の展望

今回のフォーラムでは、中国で現在進行中の「全面二孩」政策を背景とする研究が多いことが印象的であった。中国幼児教育全体の発展や、家庭でのきょうだい関係や幼稚園での仲間関係、乳児保育のニーズ、子育て支援の必要性など、様々な視点から現在の中国においてこの課題を解決するためには、日本の研究知見や実践なども有効になると考えられた。このような議論をすることは両大学の大学院生にとって新たな刺激となったと考えられる。

最後に、このような交流の機会を設けていただいた北京師範大学の洪秀敏教授、李敏誼准教授にここに記して謝意を示す。また今後このような機会を作るように相互の大学間の交流を企画したい。



写真1 日本・中国共同フォーラムの開催の様子

中日学前教育专业研究生论坛
日中幼儿教育專攻大学院生フォーラム



论坛手册

北京师范大学
中国·北京
2019年1月12日

フォーラムプログラム

時間	発表者	題目
9:00-9:10	李敏誼准教授	日中幼児教育学専攻大学院生フォーラムのご紹介
9:10-9:30	洪秀敏教授	「全面二孩」政策を背景に中国就学前教育の発展への挑戦と思考
9:30-9:50	七木田政教授	保幼小接続の課題 —発達が気になる子どもの例から—
9:50-10:10	朱文婷	「二孩時代」における中国の親の出産意欲と子育ての課題
10:10-10:30	周心慧	高齢計画外妊娠で第2子を迎えた親の子育てに関する研究 —中国のある母親へのインタビューを通して—
午前		
10:30-11:00	休憩	
11:00-11:20	本間美依子	日本の子育て文化としてのおらべうたとは？ —社会性の発達に着目して—
11:20-11:40	華詩涵	0-3歳の乳児保育のニーズと現状に関する調査と分析
14:30-14:50	勝佳伶・呉麗雯・于欣傑・王村	4-6歳児のきょうだい関係と仲間の受け入れとの関係に関する研究 —B市S幼児園の第2子を持つ家庭を中心に—
14:50-15:10	宛澤真帆	幼稚園3歳児保育室における物的環境に関する研究 —昼間時のルーティンに焦点を当てて—
15:10-15:30	宋佳・趙思璇・趙爽・張禮明	一人っ子家庭と二人っ子家庭の幼児の第2子への態度に関する研究
15:30-15:50	休憩	
15:50-16:10	周麗芳	日本児童のメディア接触と生活
16:10-16:30	陳林奇	日本の保育者による仲間集団間のトラブルへの介入
16:30-16:50	段天雪・李敏誼・Atsushi Nishikida・周心慧・Jung Hwan・叶品	家庭の子育てを支援し、親の育児ストレスを低減 少子化時代における日中韓親の育児ストレス・ソーシャルサポートとファミリーウェルビーイングの比較研究
16:50-17:00	交流と閉会式	

北京师范大学教育学部就学前教育研究所

表 共同フォーラムのプログラムと発表スケジュール